

令和元年6月20日現在

機関番号：23601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K20739

研究課題名(和文)慢性疾患をもつ子どもと家族に関わる外来看護師への教育支援プログラムの作成と評価

研究課題名(英文) Development and Evaluation of Educational Support Programs for Outpatient Nurses Involving Children and Families with Chronic Diseases

研究代表者

高橋 百合子(大脇百合子)(Takahashi, Yuriko)

長野県看護大学・看護学部・講師

研究者番号：00438178

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文):本研究の目的は、慢性疾患をもつ子どもと家族のニーズを捉えるための教育支援プログラム(『慢性疾患をもつ子どもの成長発達に合わせた支援・日頃の看護実践や気になることについて』、『子どもや家族のニーズを把握するための工夫とコミュニケーション』、『子どもや家族を取り巻く他職種との連携・社会資源や福祉サービス』)に参加した、小児科外来看護師の認識と看護実践がどのように変化するのかを明らかにし、プログラムの評価をすることである。参加者に質問紙調査と面接調査を行ったところ、看護実践を振り返る機会となっていたことや、家族への関わり方が変化したことなどがわかり、プログラムの効果が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外来看護師が慢性疾患をもつ子どもと家族のニーズを捉えるための具体的な方策については明らかになっておらず、本研究で外来看護師への教育支援プログラムを示すことにより、外来看護の質の向上につながると考えられる。本研究に参加した外来看護師は、小児看護専門看護師のモデル事例を用いた講義や他施設の看護師とのディスカッションにより、実践的な視点から学びを深めることにつながっていた。本研究で行ったプログラムの講義部分を、全国の地域医療支援病院の看護師向けに公開することにより、外来看護師への教育支援に活用してもらえることが期待される。

研究成果の概要(英文):The purpose of this study is to clarify how the recognition and nursing practice of the pediatrics outpatient nurse who participated in the education support program ('Support in line with the growth and development of children with chronic diseases, daily nursing practices, and concerns', 'Ideas and communication to understand the needs of children and families', 'Cooperation with other occupations surrounding children and families, social resources, and welfare services') for catching the needs of child and family with the chronic disease change, and to evaluate the program. When questionnaire survey and interview survey were carried out to participants, it was proven that it became an opportunity to look back on nursing practice and that the relation to the family changed, etc., and the effect of the program was confirmed.

研究分野：小児看護学

キーワード：小児科外来看護師 教育支援 慢性疾患 子ども 家族

## 1. 研究開始当初の背景

近年、医療技術の著しい進歩や医療を取り巻く社会環境の変化により、慢性疾患をもちながら地域で生活する子どもや家族がますます増加している。2005年に小児慢性特定疾患治療研究事業が法制化されたことに続き、これまで子どもや家族に対し、医療制度や支援の充実が図られてきている。慢性疾患をもつ子どもや家族が自宅で生活を送るためには、地域医療支援病院において、長期間にわたる外来での継続的なフォローが必要である。慢性疾患をもつ子どもの家族は、健康児の家族よりも精神面、身体面のストレスが高いといわれており(丸ら, 1997, 扇野ら, 2010), 外来で子どもや家族の日常生活を支援する看護師の役割が一層求められている。

地域医療支援病院の小児科外来看護師は、急性疾患の子どもが多くを占める中で、複雑なケースや慢性的な問題を抱えた子どもと家族への看護も求められているが、家族のニーズを把握する難しさや知識・技術不足を感じており、家族との関わりが難しい現状である(堀ら, 2002, 大脇ら, 2008; 2010, 別所ら, 2012)。現在、いくつかの医療機関においては、小児看護専門看護師や認定看護師を中心に専門的な看護外来を開設する取り組みが始まっている(平成22年度日本看護協会業務委員会, 2010)。しかし、現行の医療法施行規則における外来看護職の配置基準は、患者30名につき看護職1名であり、昭和23年から変わっておらず、多くの総合病院では、配置転換などにより外来に配置された看護師が、試行錯誤しながら慢性疾患をもつ子どもや家族のケアにあたっている現状がある。慢性疾患をもつ子どもの家族は、外来看護師の知識向上や看護体制の改善を望んでいることも報告されており(鈴木ら, 2003, 福田ら, 2010), 今後は、専門的な看護外来などの外来看護体制の充実と同時に、小児科外来に配属された看護師が継続看護を行うための教育支援が必要であると考えられる。

筆者が平成23年度から平成25年度に行った、科学研究費補助金若手研究(B)「慢性疾患をもつ子どもの家族と関わる外来看護師の教育支援ニーズに関する研究」では、多くの看護師が『子どもの疾患や病態に関する知識』、『子どもの発達や特徴に関する知識』、『社会資源や福祉サービスに関する知識』、『子どもの経過を理解するための知識・技術』などについて教育支援の必要性を感じていた。また、「家族看護やカウンセリングに関する研修」や「学校との連携方法」、「子どもや家族からのニーズを把握する方法」などの必要性についての意見も聞かれ、多様なニーズがあることがわかった。学習の機会については、「総合病院のため、小児科外来看護に特化した勉強会は少なく、慢性疾患に関するものは皆無」、「複雑なケースが多いため、学習を受ける時間や機会を十分に与えてほしい」、「常に新しい知識が得られるとよい」など、学習の機会に関する意見が多数聞かれた。

先行研究においては、小児科外来看護師が慢性疾患をもつ子どもと家族により良く関わるための具体的な方策についての調査や、地域医療支援病院の小児科外来看護師への教育支援プログラムに関する報告は見られない。外来看護師が求めている教育支援を行うためには、どのような方法・内容が必要かを検討し、具体的な教育支援プログラムを作成する必要があると考えられる。実際に、慢性疾患をもつ子どもや家族と継続的に関わっている外来看護師は数少ないため、プログラム作成にあたっては、地域医療支援病院の小児科外来で継続看護を行っている小児看護専門看護師から子どもや家族への関わり工夫や、外来看護体制の現状に即した教育支援方法について聞き取り調査を行うことにより、外来看護師のニーズに沿ったプログラムの作成を検討することができると考えられる。

## 2. 研究の目的

本研究は、地域医療支援病院の小児科外来看護師が、慢性疾患をもつ子どもと家族により良く関わるための教育支援プログラムを作成し、実際にそのプログラムに参加した外来看護師の認識と看護実践がどのように変化するかを明らかにするとともに、プログラムの評価をすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、3つの方法で実施した。

### (1) 教育支援プログラムの作成

研究者らがこれまでに行った教育支援ニーズについての調査結果や先行研究を参考にするとともに、地域医療支援病院の小児科外来で継続看護を行っている2名の小児看護専門看護師から助言を得て、3つの内容で構成する教育支援プログラムを作成した。

### (2) 慢性疾患をもつ子どもの家族のニーズを捉えるための小児科外来看護師教育支援プログラムの実施と質問紙調査

対象者(参加者): A県内の地域医療支援病院10施設に勤務する小児科外来看護師

研究期間: 2016年7月から2017年1月

プログラムの概要: 『慢性疾患をもつ子どもの成長発達に合わせた支援・日頃の看護実践や気になることについて(第1回)』、『子どもや家族のニーズを把握するための工夫とコミュニケーション(第2回)』、『子どもや家族を取り巻く他職種との連携・社会資源や福祉サービス(第3回)』で構成した。各3回のプログラムは、2ヶ月に1回のペースで3回行い、1回につき120分とした。各回は、小児看護専門看護師2名による講義とテーマに関するグループディ

スカッションの形式とした。

調査内容：無記名の自記式質問紙調査を行った。各回の評価として、終了直後にプログラムの満足度、講義内容の理解度、ディスカッションの学び、テーマについて日々の看護実践を振り返り感じたことを尋ね、終了後2か月後に実践への活用程度、活用した内容、プログラムについての意見・感想を尋ねた。各項目は、5段階のリッカートスケールによる選択肢と自由記述にて構成した。

分析方法：量的データは、単純集計をし、質的データは自由記述の内容をまとめた。

倫理的配慮：本調査は、所属機関の倫理委員会の承認を受けた後に、各病院の看護部長、看護師長を介して対象者へ依頼文書の配布を依頼した。対象者には、文書にて研究目的や調査方法、結果公表、協力の自由意思、プライバシーの保護、参加申込後の撤回は可能であることについて説明した。

### (3) 教育支援プログラムに関する面接調査

対象者：2016年に実施した「慢性疾患をもつ子どもの家族のニーズを捉えるための教育支援プログラム」に参加した外来看護師

研究期間：2018年10月から2019年12月

調査内容：半構成的面接調査を行った。プログラムに参加したことにより、その後の看護実践や意識にどのような変化があったのか、プログラムの内容や方法についてどのような要望があるのかについて尋ねた。

分析方法：逐語録を作成し、研究疑問ごとに内容を分析した。

倫理的配慮：本調査は、所属機関の倫理委員会の承認を受けた後に、各病院の看護部長、看護師長を介して対象者へ依頼文書の配布を依頼した。対象者には、文書にて研究目的や調査方法、結果公表、協力の自由意思、プライバシーの保護、参加申込後の撤回は可能であることについて説明した。

## 4. 研究成果

### (1) 教育支援プログラムの作成

プログラムは講義とディスカッションの形式とし、第1回目は、子どもの成長発達について学びたいという要望や他院と情報交換する機会が必要であるとのニーズから『慢性疾患をもつ子どもの成長発達に合わせた支援・日頃の看護実践や気になることについて』とし、参加者の経験から振り返りを行う内容で構成した。第2回目は、短時間で慢性疾患をもつ子どもや家族のニーズを捉えることに難しさを感じている現状や家族看護の知識が必要であるとのニーズ、家族とのパートナーシップ形成が難しい現状から『子どもや家族のニーズを把握するための工夫とコミュニケーション』に関する内容とした。第3回目は、院内外他職種との協働・連携に困難を感じている現状や、社会資源等の知識不足のため家族への関わりが難しいと感じている外来看護師が多いことから、『子どもや家族を取り巻く他職種との連携・社会資源や福祉サービス』に関する内容とした。また、外来看護師は子育て世代が多く、参加しやすいように、土曜日の午前中にする、託児をもうけること、希望する回のみ参加も可能であることとした。プログラムのねらいは、「慢性疾患を持つ子どもや家族のニーズを捉えるため、看護実践に活用できる知識を得ること、他院の看護師との情報交換を通じて、自らの看護実践を振り返るとともに、具体的な看護実践への活用について考えること」とした。

### (2) 慢性疾患をもつ子どもの家族のニーズを捉えるための小児科外来看護師教育支援プログラムの実施と質問紙調査

対象者(参加者)の属性：プログラムへの参加者は11名であり、第1回10名、第2回8名、第3回5名であった。小児科外来経験年数は1年未満が5名、1年以上3年未満1名、3年以上5年未満2名、5年以上10年未満3名であった。

プログラムの評価

- プログラムの満足度・講義内容の理解度(選択肢)：毎回終了後に行った満足度・理解度は、第1回から第3回まで全員が「とても満足した」、「やや満足した」、「よく理解できた」、「少し理解できた」と回答した。
- 各回のディスカッションの学び(自由記述)：第1回は「他病院との違いや、同じような問題や課題を抱えている」こと、第2回は「今まで看護師間のカンファレンスができなかった」こと、第3回は、「レスパイトについて、地域のニーズや課題がある」ことなどがわかったとの学びがあった。
- 各回のテーマについて日々の看護実践を振り返り感じたこと(自由記述)：「忙しさを理由にコミュニケーションを重要視していなかった」、「自分の行っていることの再確認ができ自信につながった」など看護実践を捉え直す機会となったことや、「まずは看護師間で話し合い意見交換をしたい」、「受診に来る子どもについて把握しやすい環境を整えたい」といった具体的な看護実践についての内容があげられた。
- 実践への活用程度(選択肢)・活用した内容(自由記述)：第1回は活用できたとの回答が7名中5名であり、「処置前の声かけや説明を以前より時間をかけて行った」ことなどがあげられた。どちらともいえないは2名であり、「活用するところまでは行かないが、心構えや見

方は変わった。外来看護師1名を増やすという体制になった」ことがあげられた。第2回は、5名全員が活用できたと回答し、小児看護専門看護師が紹介した情報収集カードを活用し、「現在の状況を聞き取ることができた」等が聞かれた。第3回は、活用できたとの回答が3名で、どちらともいえない1名、活用する機会がなかった1名であった。活用する機会がなかった看護師は「実践することはなかったが、看護師が他職種と連携を取りながら情報を共有し合える関係が築けていることを確認した」との気づきが得られていた。

- ・プログラムについての意見・感想(自由記述):「他院の小児科看護師とディスカッションする機会がもてて楽しかった」、「自分の対応方法などの再確認や、周囲の看護師が行っている動きを見る違った視点をもつことができた」といった肯定的な意見が聞かれた。

### (3) 教育支援プログラムに関する面接調査

対象者の属性: 面接の承諾の得られた2施設2名の外来看護師である。2名ともスタッフ、常勤、小児科専任、看護師経験年数10年以上、小児科外来看護経験年数5年以上10年未満であった。外来プライマリー制度については、プライマリー制度がある1名、一部の患者にプライマリー制度がある1名であった。教育プログラムの参加回数は、2回が1名、3回が1名であった。

プログラムの評価: 外来看護師は、「年齢に合わせた介入のポイント」や、「他職種との連携の実際」、「短時間で家族とコミュニケーションをとるための関わり」に関する具体的な講義の内容が、プログラム終了後の看護実践に役立ったと述べた。特に、「受診時に短時間でも会話ができればよいと考え、家族と話ができるようになった」ことや、「家族へ自分から一歩踏み出して声をかけるようになった」ことなど、具体的な看護実践の変化が語られた。その一方で、社会資源や福祉サービスについての知識不足や活用の難しさ、外来看護師間で個別のケースを検討することの時間的な難しさ、配置人数の少ない外来看護体制の現状も課題としてあげられた。また、今回同様に他施設の外来看護師とのディスカッションを含めた定期的な学習の機会や、疾患ごとの成人移行期支援について学習する機会についての要望が聞かれた。以上から、本研究で行った教育支援プログラムにより、参加者は認識や看護実践の変化があり、プログラムの効果が確認された。しかし、プログラムの参加人数や面接調査人数が少なく、十分な評価ができていたとは言えないという課題も残った。地域医療支援病院に配置される外来看護師の人数の少なさや、配置転換による異動、プログラム実施場所へのアクセスの悪さ等が考えられ、今後さらなる検討が必要である。

### (4) 地域医療支援病院の看護職者への聞き取り

上記の面接調査対象者が2名と少なかったことから、地域医療支援病院で教育担当経験のある看護職者3名から聞き取りを行った。その結果、外来看護師を含む中堅看護師の教育について、「日々行っている看護を語る機会がない」、「自分の行っている看護を客観的に見る機会が少ない」、「施設を超えて共に学びあう機会が少ない」ことから、「他施設のスタッフと話し合いながら客観的に実践を振り返ることの重要性」が語られた。本プログラムでは、他施設の外来看護師とディスカッションをすることにより、参加者が自らの看護実践を捉えなおす機会になっていたことから、有効な方策であったことが確認された。また、外来看護師への教育支援には、看護体制による充実とともに、スタッフのモチベーションを高めるような管理者の働きかけも必要であることが新たにわかった。

### <文献>

- 別所史子, 田崎あゆみ, 山田晃子, 上本野唱子: 小児慢性疾患外来における看護ケア実践プロセスと外来看護の専門性. 小児看護, 35(3): 375-379, 2012
- 福田典正, 福田由紀美, 廣田直子他: 当院患者アンケートに見る望ましい看護外来のあり方. 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌, 8(3), 222-230, 2010
- 平成22年度日本看護協会業務委員会: 外来における看護の専門性の発揮に向けた課題, <http://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/fukyukeihatsu/gairaikango0731.pdf>, 2010
- 堀妙子, 関恭子, 奈良間美保: 医療的処置を行なっている小児が通院している外来看護の実態と看護師の意識に関する調査. 日本小児看護学会誌, 11(2), 28-33, 2002
- 丸光恵, 兼松百合子, 武田淳子他: 慢性疾患患児をもつ母親の育児ストレスの特徴と関連要因: 健康児の母親との比較から, 千葉大学看護学部紀要 19, 45-51, 1997
- 扇野綾子, 中村由美子: 慢性疾患患児を育てる母親の心理的ストレスおよび生活の満足感に影響を与える要因, 日本小児看護学会誌 19(1), 1-7, 2010
- 大脇百合子, 内田雅代, 三澤史他: 慢性疾患をもつ子どもの家族とのパートナーシップ形成に向けた外来看護師のかかわりに関する研究. 長野県看護大学紀要, 10, 33-45, 2008
- 大脇百合子, 内田雅代, 白井史他: 医療的ケアを要する子どもの家族と外来看護師・専門職者とのかかわりに関する研究. 日本家族看護学会第17回学術集会講演集, 64, 2010
- 鈴木千衣, 小原美江, 及川郁子他: 外来通院する慢性疾患児の治療及び日常生活の現状と外来看護に対する家族の認識. 福島県立医科大学看護学部紀要, 5, 57-68, 2003

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

高橋百合子, 内田雅代, 白井史, 足立美紀, 竹内幸江: 慢性疾患をもつ子どもと家族に関わる小児科外来看護師への教育支援プログラムの評価. 日本小児看護学会第27回学術集会, 2017 .

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年:  
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

<https://sites.google.com/nagano-nurs.ac.jp/program/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0>

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号(8桁):

### (2)研究協力者

内田 雅代 (UCHIDA, Masayo)

竹内 幸江 (TAKEUCHI, Sachie)

白井 史 (SHIRAI, Fumi)

足立 美紀 (ADACHI, Miki)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。